

朝鮮

思い出は赫陽の彼方へ

愛知県 石黒 正 弘

進学そして終戦へ

昭和二十年正月を過ぎて間もなく、近くの中央警察署に動員の命を受けた。午前中、勤務の楽な事務であった。私は音楽部に所属していたので、進学希望を何気なく音楽学校と言ったところ父に大目玉を食らった。最終的に医学部ならと父も歩み寄り、進学の方向は決まった。満州医大は無理なので、地元の医大なら何とか希望がつけそうだし、しかも家から通える。そんな甘い考えで一月中旬に、新京医大を受けたら運よく

合格した。三月二十四日四、五年生同時卒業式に臨む。

四月初め新京医大入学式参列。だが各地の動員が解除され、本式に講義が始まったのは少し遅れてからだ。そんなある日のこと、担任教授が一年生全員を解剖実験室に集めた。そして解剖台に置かれてあるホルマリン漬けの死体の傍らで、今日はここで昼食をとるようにと命令されびっくり、逃げだすこともできず、涙が出るやら臭いやらで、とにかく飲み込むようにして味のない昼食を済ませた。

そのころ、日本の戦局はいよいよ最終段階にきていた。沖繩はついに占領された。更にドイツも連合軍に降伏した。ソ連は急遽、欧州戦線の大兵力を満州国境に移動させ、時期到来を今や遅しと待ち構えていたのである。このころの私たちは講義と並行して、応急手

当や人工呼吸法の訓練を連日続けさせられた。そして短期間に緑十字の腕章を着けた、粗削りな救急要員が出来上がっていたのである。

八月九日の夜中一斉に、空襲を知らせるサイレンが鳴り響き、やがて爆弾が落ちたのだろうか。ズシン、ズシンという地響きが何回か伝わってきたが、間もなく静かになった。翌朝の新聞は「ソ連機不法侵入」を告げていた。やがてラジオでソ連軍が東部国境を侵し、関東軍と交戦状態に入ったことが知らされた。

予期せぬ疎開の悲劇

その日は朝から家の中は大騒動だった。母たちを大連に疎開させるのだという。ある団体の方に誘われたと、母方の伯母が話を持ってきたのだった。兄、康弘は奉天に言って不在だったので、父は私にこう言った。

「お前は母さんについて行け」「僕は学校があるから駄目だよ」「学校へは私から話しておく」「そんなこと許されないよ」「送って行ったら帰ってくればいいじゃないか」ということで、父の命にも背けず、ついでにく羽目になった。

これが私と新京との実にあっけない別れとなってしまうのだ。その時の一行は母まき三十八歳、祖母七十八歳、それに妹三人で弘子八歳、弘美四歳、弘代一年六カ月であった。私たち疎開団は無蓋貨車に詰められて新京駅を出発した。ところが列車はのろのろと五日もかかって、大連とは全く方角違いの北朝鮮に入り込み、そこで終戦の日を迎えてしまったのだ。鉄道は南北国境閉鎖で身動きとれず、団体は止むを得ず、平壤と鎮南浦ちんなんぽに団員三千五百人を分散させて、しばらく様子を見ることにしたのである。私たちは鎮南浦の工場の社宅群に住居を割り振られ、四家族が入った。

社宅といっても屋根があるだけで扉も窓もない。中は畳もなくお勝手から押し入れのままで、すっきり空っぽの住居だった。団体部からむしろが一人二枚ずつ配られたので、入口や窓につり下げた。その日から団の炊き出しが始まった。金はみな団に預けることになり、母も持ち金を預かり証に換えた。このころ、私は本部から呼び出され、救護班の手伝いをするようになった。主任は飛松先生といわれる若い青年医師だった。

町の数カ所に分けられて收容された疎開者たちは、団の窮乏とともに見る見るうちに難民に落ちぶれていった。栄養失調となった母親の手からは、乳飲み子が次々と消えていったのである。

北国の短い秋は過ぎ、冬將軍が訪れる十月ころから、難民の多くに疥癬や、シラミが増え、日向にでてはシラミつぶしをしている者が増えてきた。また青白い顔で生気もなく、窓際でじっとしている結核の娘さんも何人かいた。「隔離をさせたいが、それもできないからな」と先生は嘆いておられた。

このころの生活を、ある団員の方が次のように滑稽に詠んでおられた。

「菰を着て 菰吊り菰敷き菰かぶり ともごも思う
ともごものこと」

十月中ごろに私たちの避難所が変わった。今度の社宅は扉も窓も畳も一応ついてはいたが、隙間もかなり多かった。できるだけ目張りをしたのだが、これで寒い冬を越すことができるのか心配であった。そんなときに、麻疹がはやりだした。今度は二、三歳の幼児が

かり、次々と肺炎を併発して死んでいった。十一月の終わりになって、弘代も麻疹で熱を出した。ところが一週間ほど過ぎても熱が下がらず、呼吸はせわしくなるばかり。飛松先生も沈痛な表情で首を横に振られた。

十二月四日その夜、母の懸命な看護もむなしく、哀れ一歳十カ月のあどけない命は、水の泡のごとく消えていった。母は街のお寺さんに弔いをお願いし、そのお地藏さんに赤い涎かけを作り、結び付けてきた。団の方がその涎かけに歌を書いてくださった。「稚けなき、み霊のあまた鎮まれり、導き守れ石地藏尊」久米。

そんな悲痛な思いのある夜、突然の物音に目が覚め息を殺した。どうやら隣の棟続きの社宅である。「ドスン、ドスン」と鈍い物音が伝わってきたが、やがて静かになった。私は異様な雰囲気気が高ぶって眠れず、そのまま朝を迎えてしまった。毎朝行われる朝礼でS団長は、「昨晚、ソ連兵が侵入してきたが、同部屋皆さんの協力で退散して行きました」という報告があった。その後も同じような物音が二回ほどあった。このような夜の恐怖におののき、慰めとなる子供の姿

もなく、暗い陰鬱な生活の続く団員たちは、部屋に閉じこもり、どの顔も一様にむくんで艶がなくなっていた。

ああ、三十八度線

一方、疎開団本部では平壤にあるソ連司令部と折衝を重ね、三十八度線通過の交渉を粘り強く進めた結果、ついに九月からの移動が認められた。私たちは十月の初めに千五百人、移動の許可が下りたのである。それも黄海道の農家へお手伝いの名目である。出発は船であった。鎮南浦の河口は干満の差七メートルというから、この上げ潮を利用して大同江を一気に上る算段か。埠頭でソ連兵の簡単な荷物の点検を受け、三隻に分かれ乗船した。団員の顔には笑顔は見られなかった。団から支給の掛け替えの無い米は、それぞれリュックサックに入れられ、瘦せた体にズシリと重かった。それに水筒と鍋である。一週間分の米はそれで十分との保障はない。

新京を出てわずか一年で、見るも無残な集団と変わり果ててしまった彼女たちに、持ち帰る財宝などある

うはずはない。団員は木造の帆船にぎつり詰め込まれ、船はゆつくりと流れをさかのぼっていった。翌日の朝、沙里院の南近くで船を下りた。ここからは徒歩である。

団体は、町や村を避け小川のある川原で炊飯をしながら進むので、一向に行進ははかどらない。途中で流れが止まった。様子を伺いに先頭へ走る。県境だそうである。隣の県に入るには、予防接種を受けなくては通行を許可しないとのことだった。思わぬ出費であった。白衣を着た十人ほどの男女が注射器の針も換えず、実に荒っぽく二の腕に突き刺していくのだ。弘子は打たれた針の先が外に出ているのを見て泣いてしまった。私はうまく逃れた。一時間ほどで済み、また行進が始まった。夜は小学校の校庭に野宿である。このころになると、明け方の冷え込みは厳しく寒くて震えた。出発から五日目、いよいよ県境近くだといわれ、異常な緊張感を覚える。また県境なのか、団体は予防注射の代金を払わされた。今度は注射は打たなかった。一種の通行料なのだ。敗戦国、難民のみじめさを痛感する。

朝鮮最後の夜も小学校の校庭だった。今度は寝るわけにはいかない。夜中の三時を期して、一斉に行動開始の手はずになっている。祖母も母も元氣だ。妹たちの煤けた顔にも、はぐれまいとする必死な面持ちが伝わってくる。団長さんの合図があつた。皆立ち上がり南に向いて足早に歩き出す。無言である。前の人の黒い影を追いながら、間隔をとって進んだ。妹たちも私のリュックサックから垂らした紐をしつかりつかんで付いてくる。途中、小さな小川があり、ももまで入るぐらゐの深さだった。妹二人を抱えて渡る。祖母も背中に負ぶって運んだ。やがて東の空が明るくなり視野が開けてきた。小さく見える前の人たちがこちらを見て手を振っている。急に元氣が出て足取りも軽くなる。みんな小走りになった。ここは青丹という町だった。驚いたことに日本婦人会の襷を掛けたエプロン姿のおばさんたちが、大きなおむすびを配ってくれた。みんな拝むようにしていただいた。

悪夢の収容所

駅に着くと無蓋貨車が私たちを待っていた。もう歩

かなくてもよいのだ。そう思うとどつと疲れが出て、へばつたように座り込んだ。貨車は突然ガシャンと動き出した。久しぶりに団員に笑顔が戻ってきた。これで日本に帰れるという安心感。それもしばらくして、私は汽車が北へ向かっていることに気が付いた。一抹の不安がよぎる。程なく私たち団体は山の中の寒村に運び込まれ、そこに降りた。議政府の難民収容所だという。有刺鉄線の柵で囲まれた中は、テント村である。大きいテントを背中合わせにしたのが、五張りほど並べてある。そんなのが十列ほどもある。優に三千人は収容できるのだ。そのごぎ敷きテントに団員たちは割り振られ収まった。そのとき、私たち以外にもたくさん避難民がいることを知った。テント群の奥には素掘りの大きな穴が掘られ、長い板を縦横に張り、柵席のようにその周りをこもで仕切った、青空便所があつた。

夕方、食事が配られた。お椀一杯の小麦の粒と、おもゆ状のお汁だった。私は初めてその奇妙なものを口にした。完全に蒸れていないのか、小麦は米のそれと

は違つて堅かつた。そのとき、ふつと朝のお握りを思
い出した。うまさよりも米と小麦の違いが不思議に思
えた。一体あのときの米は何だったのだろうか。味も
分からぬままお汁をかけて食べてしまった。

その夜、思わぬ仕事私を待つていた。夜みんな寝
静まつたころ、団の役員の方から突然呼び起こされた。
死体を焼く薪を運ぶのを手伝えということだった。中
学同期の戒田君が相棒であつたのでホツとする。道順
は簡単、早速、網の上に薪を五、六束ほど乗せ、棒を
通して二人で担いで出発した。収容所を出ると傾いた
月が辺りをわずかばかり照らし出して来ていた。そ
の辺一帯は落葉松林が続いていて、時折吹く風が不気
味な音を伴つて「ザー」と響いてくる。細い道が曲が
りくねつて、林の中に消えている。一人ではとても恐
くて歩けない。無言のまま十五分ほど登り坂を進んで
行くうちに、やや開けた場所に出た。突然、焦げ臭い
匂いが辺り一面に漂つていたが、場所はすぐ見当がつ
いた。その傍らに薪を置く。戒田はくすぶつてゐる黒
い小山の中に、無造作に薪を放りこむ。私もそれに倣

つた。しばらくして小山が燃えだし、明るくなつてく
ると、裸の焼け残つた死体が五、六体確認できた。大
人が一体とあとは子供である。周りの地面に何か目印
があるのは、親が付けたのだろうか。完全に燃え上がつ
たのを確認して帰路についた。帰りは棒と網だけであ
る。一つずつ持つていたら道を下りる。だんだん小
走りになる。最後は一目散に走つてしまった。

朝を迎えた。朝食はやはりお椀一杯の小麦と汁であ
る。これではみんな飢え死にだと思つた。おまけに昼
食もない。もう他人ごとではなかつた。できるだけ手
を付けないで残してきた焼き米を少しづつ食べるこ
とにしたのである。

入所後、すぐ気が付いたのは、所内のあちこちで五、
六歳の子供が、ふらふらと歩いていることだった。ど
の子もうつろな目をして、顔も手足も骨と皮ばかり。
ただ妙に腹だけが一樣に膨らんでいる。そのやせ細つ
た手には、空っぽのお椀をしっかりと握つてゐるので
ある。この子たちは私たちがいた一週間の間に、みん
な眠るように死んでいった。その軽いミイラのような

屍を私と戒田とで、二つ三つ重ねて担いだ。今度はガソリンと薪を持つ役員が加わった。後から放心状態の母親が、手向けの野の花を持って力なく付いてくる。私たちが最初に薪を置いた所に着く。薪を交互に積み重ねて、その上に子仏を並べた。そして更に薪を積み上げ、ガソリンをかけて火を付けたのである。このように骨を拾って帰れるのは、まだ幸運である。道中で死んだ子は穴を掘って埋めただけだった。

夢に見た引揚船

この悪夢のような収容所生活は一週間も続いたが、ようやく解放される日があった。仁川港に船が入ったのである。朝、米軍のトラックが何十台と収容所に入ってきた。心配された一人の病人も担架で運ぶことを許可してくれたので、全員乗ることができた。団員は久しぶりに顔をほころばせ明るかった。トラックは地響きを立てて走り出した。京城の街を突っ切るようにして通り過ぎ、仁川港まで一気に運び込んだのである。全員埠頭にある広場に整列し、順序よくタラップから船に乗り移った。船は三千トンクラスの大久丸だっ

たと思うが、よく覚えていない。やがて引揚船は腹に響くドラの音を湾内に残して、静かに岸壁を離れ始めた。私は甲板に上がった。送る人もなければ、名残を惜しむそんな光景は全くなかった。遠ざかる山々を見て、つらい日々を思い出し感慨無量だった。船中はぎっしりと詰め込まれ、足の踏み場もない。私たちは甲板の下にある大広間に、固まるように丸くなって座った。船は陸地を離れ、海原に出たのか揺れ出した。間もなく食事が配られた。雑炊を五人分鍋に受ける。それを空缶や湯呑みに分けて食べた。妹たちもやつと落ち着いたのか、「キヤツ、キヤツ」と騒いでいる。弘代がいなのが寂しかった。

夕方、甲板の上での自慢大会が開かれた。賞品目当てに私も参加した。「影を慕いて」を歌って、雑炊一杯の賞品を勝ち取った。

夜中船が朝鮮海峡を渡るころ、甲板の上で異様な物音がするのに目を覚ます。何やら喧嘩のようだった。隠れるようにして見る。たくさんの男たちが寄ってたかって、数人の男にリンチを加えていた。「海へ放り

こめ」とか、「スパイ野郎」と言う怒号が聞こえてきた。私は怖くなって下へ下りた。

朝早く、船は佐世保に入港と知らされて、甲板に上がった。甲板には殴られた男たちだろう五、六人が寝かされていたが、それどころではない。九州の山々が緑鮮やかに朝の陽光を浴びて、素晴らしい情景を写し出しているのだ。本当に絵に描いたように日本は美しいと思った。嬉し涙が頬を伝う。そのとき、収容所から担架で運ばれた人が亡くなったと聞かされた。上陸目前にして旅立っていくとは、さぞや残念だったに違いない。

佐世保で奇跡の再会

船は沖合で停泊した。私たちは小型の上陸用舟艇で岸壁まで運ばれた。棧橋から歩くと広場があった。そこで真っ白な粉（DDT）を頭のとっぺんからパンツの中まで、容赦なくかけられ度胆を抜かれた。それから大きな倉庫に連れて行かれ、そこでやつと腰を下ろすことを許された。

ところが腰を下ろす間もなく、だれかが新京からの

引揚者がいると、知らせてきた。まさかと思いながらもみんなに付いて行つた。別の大きな倉庫に入った。

そこもたくさんの引揚者で溢れていた。突然「正弘」と呼ばれ振り返ると兄康弘だった。二人は黙って手を取り合つた。涙が思わず溢れ出た。しばらくして「おふくろは元気か」黙つてうなずく。「弘代だけ駄目だった」「そうか：みんな苦労したんだな」「親父は元気か」「ああ、元気だよ」兄は思いついたように「そうだな。いいものがあるから持つて行こう」そう言つて団体の中に入つていく。私もついて行くと、父義博が笑つて見ていた。兄は弘代のことを告げた。父の日焼けした顔に一瞬緊張が走る。しばらくして、「そうか駄目だったか」父は大きく頷きながら、私の肩を軽く叩いて「よく頑張つたね」そう言つてくれた。兄は何やら袋を取り出すと、「さあ行こう」と今度は私が案内役だ。母と兄との感激の対面、兄は袋からビスケットや飴、キャラメルなどを出して妹たちに与えた。今度は母や祖母、妹たちが父のところへ行こうと言う。かくしてこの奇跡に近い家族対面は、日本上陸第一歩の、

ここ佐世保で実現した。

昭和二十一年十月十五日のことだった。

焼け野原の日本に涙

父と兄の団体は、コロ島から興安丸で十三日に着いたそうだ。諸手続は済んでいて、会えたその日のうちに、故郷に向かって出発した。

こちらはまだいろいろな手続が待っていたので、残念ながら一緒に帰れなかった。翌日、手続もすべて終わり、解散式が行われた。S団長の感涙むせぶあいさつがあつた。みんなも感激の涙に浸った。そして名残を惜しみながら、それぞれ地方別の車両に乗り込んだ。客車だったのが嬉しかった。

途中、福岡、広島、岡山と町のほとんどが壊滅状態なのに驚く。そして日本も同じように被害を受けていたんだと、万感胸迫る思いに打たれる。姫路に着いた。耳の遠い祖母は、弘美を抱き締めて離そうとした。母方の伯母が祖母を引き取るというのだ。やっと従姉たちに説き伏せられて、ホームに降り立った。弘美も泣いて駄々をこねている。汽車は動き出す。つら

い別れである。姫路も同様に、すっかり焼け落ちていて、無残な工場の残骸や、建物の曲がった鉄骨の黒い影が、だんだんと小さくなって闇に消えていった。神戸、大阪と通り過ぎる度に、その被害の大きさに驚き、落胆と失望の気持ちを深めていった。やがて東の空が明るみ大垣を過ぎたころ、朝日をいっぱいを受けた岐阜市街の茫漠たる焼け跡が目に入ってきた。妹たちに降りる準備をするように命じる。

弘美はもう祖母の代わりに、弘子に何かと甘えていく。一宮で降りて名鉄に乗り換え、国府宮に着いた。朝が早いせいかな通りは少なかつた。駅前にはバスの停留場と広場に面して、四、五軒のバラック造りの商店が並んでいるだけだ。

折しもガーガーとにぎやかな音が聞こえ出した。木炭車の釜から白い煙が上がっている。そんなとき「オイー」と呼ぶ声、兄がりヤカーを引いて迎えにきてくれたのだ。母と妹たちがそれに乗り、安全な脇道を通ることにした。田舎の道は一本道、南瓜畑を過ぎると広々とした田園に出る。稲はたわわに実って朝の光に

金色に映えてまばゆいばかり。

やがて、わが重本の鎮守の杜^{もり}まで来た。「よーし、もう一息だ」一兄が言う。妹たちは元氣良くはしゃいでいる。垢で煤けた顔に歯だけが白かった。

裸の再出発

本籍地重本には、父方の母かまが健在だった。叔父の長男敏雄と少しばかりの田と畑を耕していたが、突然の大所帯の引揚げにもかかわらず、大変な喜びようであった。

父は当初から、この家には長くいることはできないと考えていたようだ。戦争の悲劇はこの家にも非情の爪痕を残していたからだ。

父は帰ると直ぐ兄を使って活動を開始した。名古屋で卸商を始めようというのだ。焼け野原の名古屋は当時、どこでも進出可能であった。広小路の裏手に手ごろなバラックを借りて、卸商重弘商会を開店した。父の指図で兄は仕入れから販売まで、一手でやりまくっていた。あるとき、東京に仕入れに出掛けるということで、私もついて行くことにした。夜行列車はどれも超

満員の混雑ぶり、買い出し人や担ぎ屋たちで占められていて、座るところではなかった。東京の駅は浮浪者や浮浪児たちで、正に蛙鳴蟬噪^{あめしんせうぞう}の場と化していた。

靴みがき、もく拾い、復員姿から背広姿と千差万別である。行き先は化粧品会社だった。応対に出てきた社員の服装は寸分隙のないスーツにネクタイ、ピカピカの靴、艶やかなポマードの香り、戦争など遙かな過去の出来事として処理したかのようなスタイルに度胆を抜かれた。それに反して私も兄も佐世保で支給された国防色の兵卒姿である。兄は一向気にもせず、平然と煙草をくすぶらしながら取引に臨んでいた。帰りは化粧品の詰まった木箱二個を、一個ずつ担いで汽車に乗り込んだ。

清水駅で突然降りる、と兄が言い出したので、慌てて荷物も体も窓から出させてもらった。木箱を荷物預かり所に置いて、行き先は、万象寺の叔母のところだった。思い掛けない私たちの訪問に叔母は目を疑うほどの喜びようで、私たちを迎えてくれた。その夜は引揚げ時の苦労話に遅くまで、時の過ぎるのを忘れてし

まった。

朝、別れ際に叔母から風呂敷包みいっぱいの塩を手土産にと渡された。当時はなかなか手に入らぬ貴重な統制品である。私はそれをしつかりと腰に巻いて固定した。清水駅の預かり所から商品の入った木箱を受け取りホームに出た。

突然、兄が「正弘逃びろ」と叫んだ。私は何が何だか分からぬままホームの端へ向かって一目散に駆け出した。そのとき、遠くの方で「待てーっ」と言う声が聞こえてきた。兄が捕まった。私は柵の外側から事の成り行きを見守った。髭を生やした大きな警官だった。有無を言わず兄は二、三発平手打ちを食らった。それから箱を指差し、中身を問い正しているようだった。警官は箱の一つを開けて調べていたが、何も無いことが分かる。今度は逃げた私のことを執拗に聞いていくふうだったが、やがて立ち去った。しばらくして私は兄と合流した。兄は、「ここはあぶないから電車で静岡に出よう」と言う。私は先ほどの警官の態度が気になっていたので、「なぜ殴ったんだろう」「そりや逃

げたからだよ、お前のことを仲間だろうと言ってたけど、知らないで通しちゃった」、兄は何事も無かったかのように、淡々としていた。

電車で静岡に出ると、駅前に焼け残った区画に小さなめし屋があつたので、そこに入って天井を食べた。食へ終わると兄は何を思いついたのか、箱の蓋を開け、中の化粧品を取り出して、一番底にセロハン紙を何枚か重ねて敷いた。次いで、私の腰に巻いてある風呂敷をほどこいて、中の塩を一挙に移し替えた。そしてまた、化粧品をその上に順次詰め込み、蓋をしたのである。静岡駅のホームでもやはり点検をしていたが、今度は箱の中身を聞かれただけで済んだ。このような物情騒然とした世の中であつた。

兄の死

引き揚げてからしばらくの間、兄の手伝いをしていると、養父、仙治郎から呼び出しを受けた。

仙治郎は父の叔父で、明治三十九年十月、大志を抱いて勇躍単身渡満した。まず宮口で洋品雑貨店を開き、

明治の終わりに長春に進出、一族八人を呼び寄せ、營口から連れてきた中国人とで洋品雜貨商金泰洋行の設営に着手した。私はその長春で昭和四年二月十四日、石黒義博、まきの二男として生まれた。

昭和十年、仙治郎は金泰洋行を金泰百貨店と改名し、株式組織にする一方、新規事業として、総合卸商株式會社滿泰洋行（酒、ビール、煙草、化粧品のほか小麦、大豆など）を設立、父義博を社長に当て、事業の拡大を計った。仙治郎夫妻には子供がなく、私が養子になった。小学校五年生の時だった。

仙治郎の家は街道に面し、父の本屋に対し、新屋と呼ばれていた。仙治郎が金泰を捨てて、新京を離れたのは父より三カ月も早かったようだ。しかし、船の中でコレラ患者が出たために、コロ島の沖合で一カ月間停泊を命じられ、その分遅れたそうである。このとき、仙治郎六十八歳、養母まきえ五十一歳であった。

新屋「華仙荘」の普請は昭和に入ってからで、私が生まれた昭和四年に落成している。当時、日本は不況のどん底にあつて、庶民等しく生活に追われている時

に、御殿のような普請をしたのだから、良く言われるはずがない。どこに行つても「成金さん」で通つていたので。

仙治郎の話は「帰つてこい」だった。そして「大学に行かせる金はない。働いてほしい」と言う。断腸の思いで新屋に戻つた。仙治郎は再出発を精米所と考へていたようだ。家の一部を改造して始める心算だ。私はその案には始めから気乗りがしなかつた。そんな私の気持ちがあつてか、兄は「待つてろよ、必ず大卒へ入れてやるからな」と親父みたいなことを言つて慰めてくれた。父の商売が軌道に乗り始めたころ、滿泰洋行にいた岩間さんが、復員して仲間に加わつてくれた。兄にとっては良い助け船になると思つたのだが、昭和二十二年十一月十八日の朝だった。兄は突然、意識不明となり倒れた。名大付属病院まで運んだが、意識は戻らなかつた。その日の夕方、変わり果てた姿となり帰つてきた。弱冠二十歳、病名は「脳出血」だった。

私は、この予期せぬ出来事に心の支えを失い、失意

に打ちひしがれた。それにも増して父、母の落胆ぶり
は口ではとても言い表すことができない。さぞかし天
を怨んだことであろう。父は何のためらいもなく店を
閉めた。

兄はあるとき、私にこんなことを話してくれたこと
がある。「戦後の長春は内戦の混乱から、無政府状態
が続き危険も多かった。そんなころ、いきなり敷島警
察所に連れて行かれ、えらいリンチを受けたことがあ
るよ、帝国主義とかブルジョアの息子とかの理由で、
日本式柔道だと言って、コンクリートの床にじかに投
げられたし、ゴムホースを水に漬けては殴られた。半
死半生とはああいうときのことを言うんだろうなあ。
家に帰されたときは、体中みみず腫れになって、二、
三日は唸りどおしだったよ。お袋には言うなよ。心配
するからな」兄の突然の死が二十歳にみたくない若さで
の脳出血とは、何か因果関係があるような気がしてな
らない。

それから間まなく、父たちは駅から程近いところに
移り住んだ。兄を亡くしてからの父は商売からきっぱ

りと手を引いた。父はある会社から依頼を受け、勤め
に行くことになったが、その傍ら満州時代に楽しんで
いた茶の湯にも没頭し始めた。母も近くの織維工場に
ある高等学校に、和裁と茶華道の講師として採用され、
勤めに出掛けていた。そんなある日、懇意にしている
方から吉報がもたらされた。国府宮の駅前で店を手放
す人がいると言う話だった。父は迷うことなく話を進
めて、その店をまず手に入れた。次いで土地所有者に
も交渉した結果、裏続きの土地までも譲り受けること
ができたのである。

仙治郎金泰再建を断念

そのころ、日本に無事帰還した金泰の人たちは、ま
ず仙治郎のもとに馳せ参じた。お互いの無事を確認す
るとともに、今後の身の振り方について、指示を期待
したのである。彼らは金泰会を作って結束を図った。

仙治郎に再建の意欲を燃え立たせるためであった。し
かしながら、無情にも答えは「ノー」であった。会員
の期待に満ちた燃える眼差しを彼は感じなかったのか、
首を横に振る以外に取るべき手段はなかったのか。仙

治郎にとつては再度のチャンスなのに、それを避けた
いと思わせるほど、もう年老いていたのか。私はこれ
以上この家に止まるべきでないかと判断した。幸い、こ
の家には養母まきえのその父と兄、そして戦前から留
守を預かつてきたまきえの実弟、清一族が同居してい
るので心配はない。私は黙って家を出た。

叔父正直はそんな私の将来についても何かと心配し
てくれ、私は昭和二十五年二月、稲沢市役所の衛生課
に勤務することになった。

父の晩年

父は買い求めた店舗の裏に茶室付きの住宅を建て、
茶華道研究所を開設した。妹たちも四月から中学校二
年と小学校五年生になった。

昭和三十三年十一月、市制施行し稲沢市となる。昭
和三十四年九月、未曾有の伊勢湾台風が東海地方を直
撃し、各所に大災害をもたらした。台風は大きな爪痕
を稲沢にも残して過ぎ去った。この台風で我が家の屋
根も半分吹き飛んでしまった。

昭和五十六年十二月、父の設計でビルを建設、名称

をマントイビルと命名した。

昭和五十八年、父が体の不調を訴え検査の結果、胃
がんである旨申し渡され、あと半年の命と宣告された。
私は父の余命を知ったからには、せめて安心ぐらいい
させてあげなければと思い、二十五年から勤めた稲沢
市役所を辞めて、家業を継ぐと約束したのである。明
けて一月二日、眠るように息を引き取った。享年八十
三歳であった。

父の死後、間もなくして稲沢に新しくできた文理短
大へ事務の仕事で奉職。

平成六年三月、私は六十五歳になり、短大を定年退
職した。役所に三十五年、短大に十年、実に四十五年
勤めたことになる。

【執筆者の横顔】

石黒正弘氏の大叔父、仙治郎氏は明治三十九年に単
身渡満し、洋品雑貨商を営み、営口から長春に進出す
る際に一族を呼び寄せた。店は順調に拡大を続け、軌
道に乗ることができたのは大正十年ごろである。

正弘氏は昭和四年二月十四日、父義博、母まきの二男として生まれた。仙二郎夫妻に子供がなく、正弘氏が小学校五年の時養子となった。

昭和二十年四月新京医大に入學したが、時局は戦争最終段階に入っていた。八月九日、ついにソ連は東部国境を爆撃し始め、全満州は大騒動となった。父から、祖母、母、三人の妹を大連に疎開させるように言われ、新京駅から出発したが、列車は、大連とは方角違いの北朝鮮に入り、ここで終戦を迎えた。

収容所では土の上にアンペラを敷き寝る。夜は寒く衣食住に困り、十二月、妹弘代さんは高熱を出し、逝ってしまった。正弘氏は救護班にまわされて、東奔西走していた。団長らは、三十八度線通過の交渉をソ連と強行談判し、ようやく一千五百人移動となった。収容所生活は正に地獄の様相だった。仁川港から乗船、これで日本に帰れると喜びがあふれて涙を流した。佐世保に上陸し倉庫に入れられたが、別倉庫にいた父、兄と感激の再会。日本上陸第一歩の佐世保で一家合流が実現した。昭和二十一年十月十五日である。

父はすぐ兄を使って活動を始め、名古屋に卸商を開始した。正弘氏は兄を頼りに商売の手伝いに懸命だったが、その兄が一年後急死したため、店を閉じ、その後正弘氏は稲沢市役所に勤務となった。父が病に倒れ、余命いくばくもないことを知り、家業を継ぐことになり、三十五年勤めた役所を退職した。父の没後、文理短大に十年間勤め、現在は稲沢市の文化協会長を務めている。

正弘氏は奥深い谷間のひとしずくが、木の葉の下をくぐり流れる清水のごとく、やがて小川が大河となり、洋々たる大海原になるといった品格の持ち主である。

(御引揚者団体全国連合会)

副理事長 結城 吉之助)